

1980年代アメリカ教育改革論議と 伝統主義教育思想（1）

——教育におけるエクセレンス概念の
把握をめぐって——

松浦 良充

I. はじめに

筆者は、本稿をはじめとするいくつかの論考において、最近の、すなわち1980年代のアメリカ合衆国における教育改革論議を教育思想史的にどのように位置づけるか、という課題に取り組む⁽¹⁾。以下、このような課題を設定する理由を説明する。

筆者は、教育思想という語を、教育に関する自覚的な思索、および思索の所産を意味するものとして用いる。「自覚的」という限定をつけるのは、教育に関する無意識的なばくぜんとした思考や感情までをそこに含めるとするならば、教育思想という用語の意味は無限に拡散し、その用語に基づく論理的考察の厳密性が失われる、と筆者が考えるからである。さて多くの場合、教育に関する自覚的な思索が生じるのは、今行なわれている教育が、何らかの困難に遭遇した時である。従って教育思想には、教育の現状（もちろんそこには現状の教育の歴史性も含まれる）に対する批判と、未来へ向けての教育の改革構想とが主要な要素として含まれることになる。ゆえにある時期のある社会における教育改革論議の教育思想的背景、あるいは教育思想史的意味や位置づけを問うことは、教育思想史研究の重要な課題であると言える。

最近のわが国と同様、1980年代のアメリカでは教育改革論議が非常な盛り上がりを見せている。連邦政府をはじめとして州、学区ごとの政策レベルから、各学校のカリキュラムや教育実践のレベルに至るまで、多様な教育改革論議が展開されている。それは、「学校大論争」(The Great School

Debate)「エクセレンス運動」(Excellence Movement)などと呼ばれている。

ところで、この80年代の教育改革とそれをめぐる論議の主要動向の教育思想史的位置づけに関しては、一般に多くの場合、「伝統主義」(Traditionalism)の立場に立つもの、との把握がなされている。それは、次のようなアメリカ教育思想史の捉え方に基づいている(Ravitch: 1982, 80-89; Gross, 15-20)。つまり革新主義教育(Progressive Education)期以来の今世紀のアメリカ教育の動向は、伝統主義と革新主義との間を振れ動く振子の動きにたとえることができる。1957年のスプートニク・ショック以後60年代半ばまで続く学問性中心(discipline-centered)教育の主張は伝統主義、また60年代後半から70年代のオープン・エデュケーション、フリー・スクール、オルタナティブ・スクールの運動は、新しい革新主義の時期(Ravitch: 1983, 235ff)、そして80年代の教育におけるエクセレンス運動は再び伝統主義へと振子が戻ってきている、と言うのである。

これに対して本研究は、全体を通して、1980年代アメリカの教育改革論議と伝統主義教育思想との関連を考察し、上に述べた教育思想史的位置づけの妥当性を検証することを課題とするものである。もちろんこの場合、「伝統主義」教育思想という用語の定義が問題になる。これについては別に稿を改めて論じなければならない。⁽²⁾本稿では、まず、80年代のアメリカ教育改革論議の争点を明確にすることに取り組む。改革論議の争点、とりわけそこにおける中心概念に関する議論の枠組と、アメリカ教育思想史における伝統主義の概念構成の枠組とを比較考察することによって、上記の位置づけの妥当性を検証(もしくは反駁)することができるであろう。

すなわち本稿は、1980年代のアメリカ教育改革論議における中心概念である、教育における「エクセレンス」(excellence)概念の分析を試みる。エクセレンス概念は、改革論議の中で盛んに用いられるに従って、その意味内容があいまいになってきている。本稿では、議論のレベルに基づいて、次のような4つの観点から、最近のアメリカ教育におけるエクセレンス概念の意

味把握を分析し、その枠組の整理をめざす。

- a) 80年代の教育改革を提言する各種報告書（レポート）においてエクセレンス概念は、いかに定義され、またいかなる意味で用いられているか。（本稿Ⅱで扱う。）
- b) 各種改革レポートにおけるエクセレンス概念の意味把握に関して、いかなる議論があるか。その論点は何か。（本稿Ⅲで扱う。）
- c) 教育改革論議に対する直接的な議論ではなく、それに触発されながらも、哲学的にエクセレンス概念の本質的な意味の明確化を試みる研究において、いかなる概念的枠組が用いられているか。（本稿Ⅳで扱う。）
- d) アメリカ教育においてエクセレンスの追求が強く主張されたのは今回が初めてではない。スプートニク・ショック以降の、いわゆる60年代教育の動向が同様である。この時期に、エクセレンス概念の意味把握をめぐって、いかなる議論があったか。（本稿Ⅴで扱う。）

Ⅱ. 80年代教育改革レポートにおけるエクセレンス概念

(1) NCEEレポート（1983年）

1983年は、アメリカ教育において、「教育改革レポートの年」（Passow : 1984a, 1, 28）であった。T.H.ベル教育長官が設置した「教育におけるエクセレンスに関する全米審議会」（National Commission on Excellence in Education = NCEE）がその有名な報告書『危機に立つ国家』（NCEE : 1983）を発表したのがこの年の4月である。このレポートは1980年代の教育におけるエクセレンス運動の中心として、教育改革論議の論争の的となった。ちなみに80年代教育が追求すべきものとしてのエクセレンスという概念の使用は、このレポートが契機になったものと見られる。⁽³⁾同レポートは、レーガン保守主義政権の教育政策の表現としての政治的文書の性格をもつ。つまり政策的なスローガンとしてエクセレンス概念が用いられている点に留意する必要があるだろう。⁽⁴⁾

さてNCEEレポートは、エクセレンス概念を次のように定義している

(pp.12-13)。

「我々は、『エクセレンス』を互いに関連するいくつかの事柄を意味する語として定義する。ひとりひとりの学習者のレベルにあっては、その語は、学校や職場において個人の能力の限界を試し、これを押し拡げるようにひとりひとりの能力をその限度にまで発揮させることを意味する。エクセレンスは、学校やカレッジがすべての学習者に高い期待と目標とを設定し、彼らがこれを達成するようにあらゆる面で助力すること、をその特徴とする。エクセレンスは社会を次のように特徴づける。すなわち社会が以上の方針を採用することである。そうすれば社会は、その国民の教育と技能とによって、急激に変化する世界の挑戦に対応する態勢を整えるであろう。わが国の国民と学校やカレッジは、このようなすべての意味でのエクセレンスの達成に専心しなければならない。」(強調は原文)

つまり、すべての子どもの能力を最大限に発達させることが、ここで言うエクセレンスの意味である。従ってそれは少数のエリート養成のための教育理念を表明してはいない。公正さ (equity) と質の高い学校教育 (high-quality schooling) はともに、アメリカ経済と社会に「重要かつ実地的な意味」をもつのである (p.13)。

このような教育におけるエクセレンス達成のために、NCEEレポートは具体的に5つの勧告を行なっている。そのうち、上記のエクセレンス概念把握にかかわる3つの概略について見てみる (pp.23-33)。

- 勧告A<内容>：高校卒業要件の強化。4年間に5つの新しい基礎教科 (New Basics) を履習させる。(国語4年間、数学3年間、理科3年間、社会科3年間、コンピュータ科学1年半。カレッジ進学者はこれに加えて外国語2年間)。
- 勧告B<基準 (standards) および期待>：学校や大学はより厳しい測定可能な教育基準を採用する。4年制大学の入学許可基準を高める。
- 勧告C<時間>：新しい基礎教科により多くの時間を割く。授業時間数、授業日数を増やす。

このように具体的勧告においても、基礎的教科の重視と教育の質的基準（水準）の全般的なレベル・アップがめざされている。以上がNCEEレポートにおけるエクセレンス概念把握の特徴である。

(2) その他の改革レポート

NCEEレポートの発表に前後して、特に1982～84年に集中して、様々な機関・団体・個人が多くの教育改革提案・レポートを発表した。それぞれの主張は多様である。しかしそこに見られる共通の傾向性を抽出することで、主要各改革レポートのエクセレンス概念把握の共通の特徴を考えてみたい。⁽⁵⁾

表Ⅱ－1：主要教育改革レポートの報告の特徴

勸告 レポート名	カリ キュ ラム 改 訂	要 強 国 語	要 強 数 学	要 強 理 学	要 強 社 会 科	要 強 科 学 技 術 ピ タ コ 学	英 才 有 能 児 へ の 特 別 な 配 慮	学 習 の た の ま な 配 慮	理 論 的 の 調 強
①危機に立つ 国家	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑦エクセレン スへの行動	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑤メイキング ・ザ・グレイド	○	○	○	○	○	○		○	
⑥カレッジへ の学問的準備	○	○	○	○	○	○			○
③学校という 名の場所		○	○	○	○	○	○	○	○
②ハイ・スク ール	○	○	○	○	○	○	○	○	
⑨ホーレスの 妥協	○								○
⑧21世紀への アメリカ人の 教育	○		○	○	○	○	○	○	○
④パイディア 提言	○	○	○	○	○			○	○

注) 1. (Fantini, pp. 69-70) の図表をもとに作成

2. レポート名の番号は、註(5)の改革レポートのリスト番号に対応。

Passowは主要な教育改革レポートを詳細に検討し、そこにおけるエクセレンス概念の定義として、次のようなものを列挙している (Passow : 1984 a, pp.37, 87)。

- 教育の基準を高める。／高校卒業要件、カレッジ入学要件を高める。
- 選択科目を減らす。／数学・理科を増やす。
- 宿題を増やす。／授業時間数・授業日数の増加。
- 学校や教室の秩序。
- より定期的なテストの実施。
- 基礎的教科の共通のカリキュラムをすべての生徒に必修とする。

このようなエクセレンス概念の把握は、表Ⅱ-1に示されるように、各改革レポートの勧告の特徴にも明らかである。

またPassowによれば、ほとんどのレポートがエクセレンスと公正さ・平等性とは矛盾しないと捉えている (p.88)。このことは、表Ⅱ-1において、英才の教育への配慮よりは、学習の遅れた子どもへの配慮を勧告するレポートの方が多い、という事実にも裏付けられている。

1980年代の教育改革レポートのエクセレンス概念は、総じて、知的、基礎的教科の履習基準を高めて、その基準をすべての生徒が達成できるようにすることを意味している。しかもその到達度は、テストによって判定可能な基準である、との把握がなされている。このような概念把握は、エクセレンス追求のスローガンのもとに実施されている各州 (コロンビア特別区を含む) の教育改革の実施状況 (表Ⅱ-2参照) にも如実に反映されている。

ではこのような教育改革レポートにおけるエクセレンス概念の把握に対しては、どのような議論が生じたであろうか。次節において検討する。

表Ⅱ-2：各州の教育改革の実施状況

	カリキュラム 改 革	卒 業 要 件 強 化	生 徒 評 価 テ ス ト	学 問 的 プログラム強化
アラバマ	○	○	○	
アラスカ	○	△	○	
アリゾナ	○	○	△	○
アーカンソー	○	○	○	○
カリフォルニア	○	○	○	○
コロラド	△	△	△	△
コネティカット		△	△	
デラウェア	△	○		○
コロンビア特別区	○	○	○	○
フロリダ	△	○	○	○
ジョージア		○	○	
ハワイ	△		△	△
アイダホ	△	○	○	
イリノイ	△	○		○
インディアナ	○	○	○	○
アイオワ	○			○
カンサス	△	○	○	△
ケンタッキー	○	○	○	○
ルイジアナ	○	○	○	○
メイン		△	△	
メリーランド	△	△	○	○
マサチューセッツ	△		△	△
ミシガン	○	○	○	
ミネソタ	△	△	△	△
ミシシッピ	△	△	○	○
ミズーリ		○	○	△
モンタナ	○	○	△	○
ネブラスカ	△	△		△
ネバダ	△	○	○	△
ニュー・ハンプシャー	△	△	△	
ニュー・ジャージー	△	○	○	○
ニュー・メキシコ	○	○		○
ニュー・ヨーク	○	○	○	○
ノース・カロライナ	△	○		○
ノース・ダコタ		○		
オハイオ	△	○	○	○
オクラホマ		○	△	△
オレゴン	△	○	△	△

	カリキュラム 改 革	卒 業 要 件 強 化	生 徒 評 価 テ ス ト	学 問 的 プ ロ グ ラ ム 強 化
ペンシルヴェニア	○	○	△	
ロード・アイランド	△	△	○	△
サウス・カロライナ	△	△	△	○
サウス・ダコタ	△	○	○	○
テネシー	○	○	○	○
テキサス	○	○	○	○
ユタ	△	○		
ヴァーモント	○	○	○	○
ヴァージニア	○	○	○	○
ワシントン	○	○	○	○
ウエスト・ヴァージニア	○	△	○	○
ウィスコンシン	○	○	○	○
ワイオミング	△	△		○
△ 計	23	13	13	11
○ 計	22	35	29	29
計	45	48	42	40

- 注) 1. △→検討中または提案中。
○→法律制定済または承認済。
2. (United States Department of Education, pp. 144 - 146) より作成。

Ⅲ. エクセレンス概念の把握をめぐる議論

改革レポートのエクセレンス概念把握に対する批判の第一の特色は、その定義の狭さについてである。すなわちそれはエクセレンスを知的な分野に限定した概念として、しかもテストの得点をエクセレンスの達成度の指標とすることへの批判である。例えばNewmann and Kellyによれば、NCEEの勧告にある教育基準の設定・強化は恣意的である。それは生徒に正義に関する単一の定義を覚えさせることになり、学習者の個性を脅かすものである。そこでは生徒の美的感受性や身体的能力の発達が考慮されておらず、個人の能力を狭くバラバラなものとして扱っている (pp.223-225)。また標準化された多肢選択の実力テスト (standardized multiple-choice achievement

test) や基礎学力テスト (minimum competency test) の得点は、批判的思考力や問題解決能力、創造性などの高度の知的技能を計測することができない (Down, 275; Darling-Hammond, 249)。とりわけ高校の卒業要件の強化と学力テストの利用は、結果として中途退学者を増加させることにつながる (Down, 275; Brown, 299)。

このような画一的基準の設定・強化を意味するエクセレンス概念への批判は、同時に生徒の多様な能力や個人差に応じた教育の必要を主張する。例えばDownは、教科の達成度に従ったグループ編成こそすべての生徒に対してエクセレンスを追求するための合理的な方法でありうる、と主張する (p.275)。また、個人の最高の能力を引き出すことが教育におけるエクセレンスの追求を意味するとすれば、それは強制とは相い入れない (Raywid, 402)。さらに、エクセレンスの達成を、基準の強化や履修科目の強制によるのではなく、各学校や各教師の創造性に任せるべきであるとの主張がある。その主張の中には、企業のエクセレンスに関するPeters and Waterman (1982) の研究から学ぶべきことを指摘したものが多いため (Howe II, 290-291; Cross, 268-269)。企業のエクセレンスは、ごく普通の労働者が、個人主義的企業家精神に基づいて並はずれた努力をする時に達成される、と言うのである。⁽⁷⁾

改革レポートのエクセレンス概念把握に対する批判の第二の特色は、この概念の論理的に対立する二重の意味である。これは上の画一的基準の批判と、根本において共通している。多くのレポートにおいては、エクセレンスはすべての生徒に共通の基準の強化を意味する、と把握されている。しかし直観的常識的には、エクセレンスは、基準や共通であるものを意味するよりは、むしろ並はずれていることにつながる (Raywid, 402)。特にこの場合、テストの得点をエクセレンスの指標にすることには論理的矛盾がある。つまりそれは、すべての生徒を平均点以上のレベルに到達させようとするようなものである (Howe II, 284)。Newmann and Kellyもこのようなエクセレンス概念のジレンマを指摘している。つまり我々はエクセレンスを、①ある分野または技能における傑出した基準、②誰にでも (common) 適切な基準、と定義

してきた。この二つの概念構成の緊張関係は、特に教師の生徒に対する資源（時間）配分を決定する際に顕著になる。つまり、1）学習の進んだ生徒を優先する、2）学習の進んだ生徒と遅れた生徒とに平等に配分する、3）学習の遅れた生徒を優先する、という三つの条件の間で選択することが求められる。しかし人間的な尊厳の理想にはエクセレンスへのかかわりが含まれている。個人の能力の発達はすべての人間に平等に求められているからである。従って、平等へのかかわりは、エクセレンスの追求よりも論理的にさらに根本的なものである。ゆえに公の資源は、学習の遅れた生徒に振り向けられるべきであって、我々は3）の条件を選択しなければならない。ところがNCEEをはじめとする諸勧告は、この問題に関してほとんど注意を払っていない（pp.225-226）。

以上のように、80年代の教育改革レポートのエクセレンス概念把握に対しては、とりわけ画一的な教育基準をすべての生徒に必修に課することで全般的な水準のレベル・アップを図る、という点に批判が集中している。そのような画一的教育基準の押しつけは、中退者を生み、結果として、エクセレンスの達成が不可能になる。またこのようなエクセレンス概念の把握には、*excel*（何かにまさる、ぬきんでる）という動詞から類推される、「他をしのぐこと、並はずれていること」という常識的な意味とのズレやジレンマが指摘されることになる。すべての生徒に共通に教育水準を向上させる、という意味はエクセレンスという語よりは、むしろ「質（の高さ）」（*quality*）という語を用いる方が語の正確な用法に適している、と筆者は思う。しかしGardnerが指摘するように、エクセレンスは人々にとって「奇妙に力強い言葉」（1961, xii; 1981, 10）である。従ってそれは教育改革推進のためのスローガンとして用いられるのに好適である。改革レポートのエクセレンス概念に対する批判は、逆接的に、80年代教育改革論議におけるエクセレンス概念の特徴を浮き彫りにしていると言することができる。

IV. 教育におけるエクセレンスの概念的枠組

エクセレンス概念の分析作業をより深めるために、次に、哲学的にその概念的枠組の整理を試みた研究を検討する。これらは教育改革レポートをめぐる教育改革論議に触発されながらも、直接的にその議論における概念把握を批判するというよりは、より本質的にエクセレンスの概念的枠組の整理を試みたものである。

(1) McDaniel (1985) の概念的枠組

McDanielは、教育のエクセレンスを現在主唱している者が、いかなる意味でこの語を用いているかを分析する。それによれば、例えばNCEEレポートでは、エクセレンスは、「科学技術上の、また経済上の成功をめざす国際競争において、教育が整備されており、かつ競争の優位にある状態として」用いられている (p.390)。また他の改革レポートは、エクセレンスを、学問的・知的基準、基礎的技能、学力テスト、より伝統的な教科の復活、などの多様な意味を表す概念として用いている。このようにエクセレンスは明確には定義されていない。そしてそれは、教育改革を正当化するために、無批判に、情緒的スローガンとして使われているのである。

このように指摘した後、McDanielは、エクセレンス概念の明確化を図るため、エクセレンスを求める教育運動に対して共通の枠組を提供している仮説 (assumption) を三つあげている (pp.391-393)。まず第一の仮説とは、エクセレンスは教育界の外にいる人々から教育エスタブリッシュメントに押しつけられねばならない、というものである。すなわちエクセレンス運動は、ビジネス・リーダーや政治家が教育政策の力と権威の源であると仮定する傾向にある。第二は、テストの得点がエクセレンスの最もよい指標である、という仮説である。エクセレンスに関する文献の大部分は、学問的技能や教科の知識についてのテストの得点が上がれば、エクセレンスが生み出されたことになる、と仮定している。最後に第三は、すべての生徒に習得が求められ、標準テストによって判断されるような、学問的教科の全生徒共通のコア・カ

リキュラムを採用する場合にのみ、アメリカ教育はエクセレンスを達成する (become excellent) であろう、という仮説である。これらの仮説は、教育のエクセレンスを主唱する人々に特有の教育目的を表現している。

次にMcDanielは、エクセレンス運動の主唱者が強調する価値を三つあげる (pp.393-395)。第一の価値は鍛練 (discipline) である。これには知的・人格的 (personal) の両面がある。知的な鍛練の面では、エクセレンスの主唱者は、基礎的技能と伝統的教育内容の習得を強調する。つまりそれは具体的には3 R's や思考力、問題解決能力、そして歴史や言語における伝統的教育内容の共通のコア、などの習得を意味する。人格的な鍛練の面では、エクセレンス運動は、よき秩序と平和な教室の雰囲気を保証する伝統的な規律 (discipline) の実行を強調する。エクセレンス運動が強調する第二の価値は、競争である。この運動は大部分を、1960年代の新革新主義の改革が信奉した諸価値への反動と見ることができる。つまり当時、とくに貧しい人々と黒人に対して、協調、共有、コンセンサスやコミュニティといった価値が強調されていた。しかしエクセレンス運動は、国、学校、教師や生徒が最良のものであるために必要な、競争の価値を強調する。第三は、ヒューマニティーズにおける伝統的な学習によってはぐくまれる伝統的な価値である。

以上のようにMcDanielは教育哲学の立場からエクセレンス概念の明確化を試みた。それは現状のエクセレンス運動を対象に、意味、仮説、そして価値の観点から概念の枠組を整理している。McDanielの整理はエクセレンス運動の概念把握の特徴を捉えるためには非常に有益である。しかしながら、これらの枠組の間にある矛盾や緊張関係がここからは明らかになってこない。例えば、教育基準の設定と競争の価値との間に矛盾はないであろうか。前者は、すべての生徒の教育水準のレベル・アップをいわば画一的にめざす。ところが後者の競争の価値には、規制緩和や自由が必要である。エクセレンス概念のこのような矛盾については、前節においても指摘されていた。まさに80年代のエクセレンス概念は、このような矛盾をはらんで展開されているのである。McDanielの概念枠組の整理においては、この点の自覚があい

まいである、と筆者は考える。

(2) エクセレンスの方程式 (Fantini: 1986)

Fantiniによれば、エクセレンスの追求は人類の切望である。現在は社会のあらゆる分野でエクセレンスが求められる時代である。とりわけ国家意識が揺いだときにエクセレンスが求められる。社会の変化に従って、エクセレンス概念の意味するところも変化する。学校は社会の価値を反映する機関である。従って学校は、我々の社会の最も基本的な価値に関してエクセレンス概念を再定義する必要がある。

このように論じてFantiniは、今の社会をもたらした社会構造の変化を様々な観点から説明する。そしてそれに基づいて現代社会のエクセレンス概念の定義を、五つの概念を構成要素とする次のような「エクセレンスの方程式」として表した (pp.44-60)。

エクセレンス = 質 (Quality) + 平等性 (Equality) + 効果 (Effectiveness) + 効率性 (Efficiency) + 参加 (Participation)

各構成要素について簡単に説明しておく。まず「質」という概念は、教育の領域においては、学習者の全能力の発達、個人の可能性の極限までの開花を意味する。質の概念は、学習者の性質やカリキュラムの性質、また教職員などの概念によって規定されてきた。しかし質の概念にとって重要なのは、教育の成果という概念である。すなわち質(の高さ)は、すべての学習者がその能力を達成した時に実現される、という点を重視するべきである。次に「平等性」の概念に関しては、それがエリート主義に陥らないためには、もはや機会の平等(均等)だけでは不十分であると主張されている。「効果」の概念については、私企業の論理の影響が見られる。つまり公教育の生産性を高めるために、より多くの人々が学ぶためのテクニックを開発することが求められるのである。また「効率性」の概念は、教育においても資源は限られているので、経済的方法を求めるべきことを意味している。最後に「参加」の概念である。Fantiniによれば、教育に対する市民参加は、民主主義国家

のエクセレンスの定義の中からは排除できない。

Fantiniはエクセレンス概念を、多くの構成要素を含めることで、広く捉え、その意味を豊かに定義している。しかしながら、なぜこれらの五つの構成要素が選ばれたのか、という根拠が定かではない。しかもあらゆる要素をエクセレンス概念の意味構成に含めたため、意味があいまいになる。このエクセレンスの方程式は、エクセレンス概念に、多様な思い入れと意味を込めることで、教育改革・教育実践を導く有効な概念にしようとする最近の傾向を示す一つの典型である、と筆者には思われる。

(3) Prakash and Waks (1985)

Prakash and Waksの研究は、我々がいかなる種類のエクセレンスを追求すべきかを考察する際に役立つような概念的枠組を展開することを目的としている。それは現在の教育改革論議におけるエクセレンス概念を直接的に分析しようとするのではなく、より本質的、哲学的立場から現代のアメリカ教育の目的を論じようとして考察が進められている。Prakash and Waksは、ここで、各々独自のエクセレンスの基準をもった、教育に関する四つの概念構成 (conception) を設定する。すなわちその四つとは、①技術的 (technical)、②理性的 (rational)、③人格的 (personal)、そして④社会的 (social) 概念構成である。さらに各々の概念構成の基準は、それぞれ、①精神的熟達 (mental proficiency)、②訓練のイニシエーション (disciplinary initiation)、③自己実現 (self-actualization)、④社会的責任 (social responsibility)、である (p.79)。

各々の概念構成について簡単に説明を加えておきたい。まず第一の概念構成は、「熟達としてのエクセレンス」である。このエクセレンスの「技術的」概念構成の中心にあるイメージは、理性的生産としての教育である。すなわちこの概念が目的とするのは、知的 (cognitive) 能力であり、標準テストまたは他の客観テストによって測定されるひとまとまりの知識と知的技能である。この場合の価値基準は量的なものであり、エクセレンスは模範的なテ

ストの得点という意味での熟達のことである。このような考え方は、NCEEをはじめとする多くの改革レポートの中に貫かれている (pp.81-82)。

第二の概念構成は、「訓練のイニシエーションとしてのエクセレンス」である。この概念構成において、教育は若者の知的社会化を意味する。ここでは、例えば科学的、美的・道徳的などの多様な訓練の視野から世界を捉える能力がエクセレンスの達成とは切り離せないのである。この場合、問題解決に必要な訓練された思考力や、分析的、創造的、想像的な能力が求められるのである。

第三の概念構成は、「自己実現としてのエクセレンス」である。この教育の人格的概念構成は、個人としての人間は、生物的社会的条件づけからの自由を一生をかけて探究するものだ、という見解から生じる。自己実現は人間発達の目的であるがゆえに、エクセレンスの概念構成のための原理と基準になるのである。この概念構成においては、思考や知的達成の基準は、様々な訓練の慣習に由来するのではなく、我々の人間性に由来するのである。この場合、学習者が教育状況の中心である (pp.85-87)。

第四の概念構成は、「社会的責任としてのエクセレンス」である。教育に関するこの社会的概念構成の関心は、個人を越えてコミュニティへと広がる。それは個人の目的をコミュニティの目的の文脈の中で満足させようとする。この概念構成は、自己実現を重視する。各人の善は共通善 (公共の福祉 = common good) に依存するのである。従って社会的責任がこの場合の教育のエクセレンスの基準となる (pp.87-90)。

Prakash and Waksによれば、以上四つの概念構成の間の関係は、①→④へと、後へ進むに従って、それぞれ前の概念の限界は排除し、適切な価値は包含しながら、後の概念ほどより包括的な形へと発展していると見ることができる (pp.79, 93)。従って最終的に、国家の教育目標として選択すべきは、第四の社会的責任としての教育のエクセレンスという概念構成である (p.79)。NCEEは学力テストの得点の低下を国家の危機として捉えている。しかし、核兵器による全滅の危機に瀕して、平和へ向けて必要な教育の

エクセレンスに関する概念構成は、まさに第四の枠組である、と彼らは主張している。

PrakashとWaksの概念的枠組は、McDanielとは違って、理念型として示されている。現下の教育改革論議における概念把握を対象とするのではなく、教育という概念自体の本質的概念構成から四つのエクセレンスの理念的構成を導き出したものである。従って、それは、なぜ教育の目的としてあえて「エクセレンス」という概念を設定するのか、という疑問に答えることができない。そこでは、教育が本質的にめざすもの、と教育におけるエクセレンス（という概念で表現された目的）の意味とが混同されている、と筆者は考える。教育のエクセレンス概念を世界平和にまで関わらせて、人類史的視点から広く捉えたことは評価できる。しかしエクセレンス概念自体の意味は必ずしも明確になったわけではない。

V. 1960年代のエクセレンス概念把握

アメリカ教育の目的としてエクセレンスの追求が叫ばれた時期を歴史上に求めるとするならば、それは1957年のスプートニク・ショック以降1960年代半ばまでの時期である。この時期の教育におけるエクセレンス概念把握の特徴を概観し、以上考察してきた80年代の概念把握と比較検討してみたい。

スプートニク・ショックは、アメリカ教育に、特に科学技術の面での才能・有能な人材の養成を緊急課題として課した。このような動向を敏感に受けとめてまとめられたのが、ロックフェラー兄弟基金の「教育に関する研究班」(Panel on Education : John W. Gardner議長)による報告書『エクセレンスの追求—教育とアメリカの将来—』(Rockefeller Brothers Fund, Inc., 1958)である。この報告書は、これまでのアメリカ社会は「協調」を重視してきたが、これからは自由な個人の方への信頼、創造的人間の尊重が必要であると訴える(p.ix)。すなわち変化する社会の要求に見合うように才能を供給しなければならない。現代社会の科学技術は高度の才能を必要としており、訓練された才能や技能への要求が増大しているのである(p.7)。

同書によれば、民主主義社会におけるエクセレンスの追求は、次のような点に留意すべきである。第一に、エクセレンス概念を狭く捉えてはならない。エクセレンスは、知的、芸術的、音楽的、人間関係などの多くの種類、多くのレベルにおいて達成されるものである。第二に、エクセレンスは、能力や動機づけや性格の産物である。生まれつきの素質のみがエクセレンスの指標ではない。第三に、才能における差異の判断は人間的な価値における差異の判断ではない点を認識すべきである。このようなことをふまえれば、平等性の道徳的価値を維持しつつエクセレンスの理想を求めることが可能になるのである (pp.16-17)。

以上のような概念把握のもと、教育制度においては、個人の可能性のあらゆるレベルでの最大限の開花をめざす質の高い教育の実施が主張されている (p.22)。そしてすべての生徒への一般教育のカリキュラムと英才への特別の配慮の必要性が説かれている。また時代の求めに応じて、科学教育の重視と多様な能力の活用も提案されている。

同報告書の実質的な執筆者であるGardnerは、1961年に単独で『エクセレンス』という書物を著した。さらに彼は1984年に同名の書物の改訂版を出している (Gardner : 1961 ; 1984)。後者の版では、特に、第四章「公民権」、第五章「機会の平等か、結果の平等か」、第十章「学校の困難な課題」などが新しく加えられている。また章のタイトルだけを変更したものも含めて、旧版の内容も部分的に書き直されている。

Gardnerの主張の根本は、多様な能力におけるエクセレンスを認めよう、ということである。すなわち教育におけるエクセレンスを追求しながら平等性を維持することは可能なのである。すべての生徒の各々の能力に応じて、その可能性を最大限に達成するのである。高度に科学技術の進歩した社会には、エリートだけでは不十分である。「我々は、すべての人に対する関心の文脈の中でエクセレンスを追求しなければならない。」(原文イタリック) (1961, 77) のである。同時に教育機関も多様化しなければならない。各教育機関は、それぞれ独自の教育目標に関して各々のエクセレンスを達成する

べきである(1961, 84)。

Gardnerはエクセレンスの概念構成については柔軟性をもって考えるべきだと主張する。つまりエクセレンスには多くの種類がある。知的な分野だけに限っても多様性がある。また、芸術、音楽、工芸、人間関係、技術的仕事、指導性、親としての責任などにもエクセレンスは存在する。さらに経営におけるそれなどのように教育制度以外の場で育成されねばならないエクセレンスもある(1961, 127-128; 1984, 115-116)。

このようにGardnerは多様な能力のエクセレンスを追求することを説いた。しかし結果として60年代教育の実際の動向は、エクセレンスを知的能力に限って追求したと言えよう。それを最もよく表すのが、60年代教育の理論的リーダーと言ってよいBrunerの見解である。彼は次のように述べている。

「教育の最も一般的な目的はエクセレンスを涵養することであると思われる。しかしこの言葉がいかなる意味で用いられているかを明確にするべきである。ここではそれは、優れた生徒に学校教育を与えるだけでなく、各々の生徒が自分に最適な知的発達をとげるように助けることである。教科の構造を強調する良き教授は、おそらく英才にとってよりも、あまり有能でない生徒にとってより価値があるだろう。なぜならば、まずい教授によっていとも簡単に軌道から放り出されるのは、前者ではなく後者であるからだ。」(p.9)。

このようにBrunerは、教育目的としてのエクセレンスを知的能力の発達に限定している。しかし彼はまた、才能に恵まれた生徒にも、そうでない生徒にも、その能力に応じたエクセレンスを達成することの必要性を主張している(p.70)。能力に応じた多様なエクセレンス追求を唱える点では、Gardnerと同一の概念把握をしていると言える。

このような1960年代の教育におけるエクセレンス概念の把握は、多様な能力に応じてその達成を多様なレベルで求める、という意味での「能力主義」的な特徴をもつ。すべての生徒のエクセレンスの追求がめざされるのだが、そこでは能力差を基準としてその達成のレベルが異なるのである。Afsher

は、60年代の教育におけるエクセレンス追求の動向が、英才教育への傾斜を見せ、エクセレンス達成の手段としての競争原理が導入されたことを指摘している (pp.36, 51-52)。この点で、画一的な教育基準の設定が大半を占める80年代のエクセレンス概念把握とは対照的である。またBrehumによれば、エクセレンスの追求という用語は1961年までで、それ以降64年ごろには、この概念が一切合切の意味を含んであいまいになったため次第に用いられなくなった、と指摘している (pp.163-165)。そして80年代に入って、再び独自の概念把握を含みながらこの語が使われるようになったのである。

VI. むすび——エクセレンス概念の二つの意味把握——

以上の考察から、アメリカ教育におけるエクセレンスの概念の意味の把握には、次のような大きな二つのタイプの概念的枠組があることがわかった。

第一の概念的枠組は、エクセレンスという概念の常識的な用語に近い意味把握に基づくものである。つまりそれは、より優れたもの（卓越したもの）をめざすこと、他人よりまさること、他を凌ぐこと、などを意味する。教育においてこのエクセレンス概念は、子どもの可能性、能力を最大限にまで達成することを意味する。この場合、結果として特に英才児の能力開発に重点が置かれることが多い。しかしながら、平等性とエクセレンスとの両立に関しては、各自がそれぞれのもてる能力の最大限の開花をめざす時エクセレンスは平等に達成される、という論理が展開される。すなわちエクセレンスの追求とは、多様な能力の多様なレベルにおける達成をめざすことに他ならない。ただしこの概念的枠組は、教育における競争原理の過度の強調によって、選別的、エリート主義的傾向をうみやすい、と考えられる。このような概念把握は、1960年代に特徴的なものであった。

これに対して第二の概念的枠組は、特に1980年代の教育改革論議における意味把握の特徴である。つまりエクセレンスとは、この場合、全体にわたって質的なレベル・アップをめざす、という意味である。教育においては、この概念把握は、基礎学力、基礎的技能をすべての子どもに習得させることに

よって、教育水準の全般的な底上げをめざす。平等性の問題に関しては、すべての生徒に質の高い教育の提供をめざす、という論理展開がある。しかしこの概念把握は、子どもの個性、個人差を軽視して、画一化するおそれをもつ。この場合のエクセレンスは、「質の高い教育」とほとんど同義である。

1980年代も60年代もともに、アメリカ国家では、産業界から人材養成の要求が教育界につきつけられた時期であった。しかしいわゆるハイ・テク時代、情報化社会といわれる80年代のアメリカ社会が必要とする人間像は、いかなるものであろうか。それは少数ではあるが有能なエリートたちなのか、ある程度高度な知的訓練のゆきとどいた等質的大衆なのか。産業構造の問題ともからんでおり、この問題については簡単に結論は出せない。しかし、同じエクセレンスという語をスローガンとして用いながらも、その意味把握には、80年代と60年代とで微妙なニュアンスの違いが見られる。この違いの中に、80年代の教育改革が進もうとしている方向の特色を読みとることができるように筆者は考える。

註

- (1) 拙稿「パイディア教育改革提案（1982—4年）の問題点——M.J.ア
ドラー教育改革論の批判的検討——」（『教育哲学研究』第54号，教育哲学
会，1986年11月）も、このテーマに沿った研究の成果の一部である。
- (2) Harts（1955）は、個人主義的リベラリズムを共通のドグマとして出発
したアメリカでは、リベラリズムが有力な対抗思想を持たず容易に絶対主
義的な性格をもつようになったことを指摘した。これとの類推から筆者は、
特に今世紀のアメリカ教育思想史において主流を占めてきた革新主義教育
思想に対して、いわば対抗思想としての立場を貫いたいくつかの伝統主義
教育思想に現状批判に関する「革新性」が見られるのではないかと、この仮
説のもとに、伝統主義教育思想に注目してきたのである。
- (3) 例えば1982年現在の各改革レポートを分析したGray（1982）には、改
革のキー・ワードとしての「エクセレンス」という語は見あたらない。代

わりに、「質」という語はよく使われている。

- (4) 保守主義と教育改革との関連については、Pincus (1984) が詳しい。
- (5) Passow (1984b) がとりあげている教育改革レポートのうち主要なのは次のようなものである。(数字は章を示す。一部略。)
1. The National Commission on Excellence in Education, *A Nation at Risk: The Imperative for Educational Reform*. (Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1983). ED 226 006.
 2. Ernest L. Boyer, *High School: A Report on Secondary Education in America*. (New York: Harper and Row Publishers, 1983).
 3. John I. Goodlad, *A Place Called School: Prospects for the Future*. (New York: McGraw-Hill Book Co., 1983).
 4. Mortimer J. Adler, *The Paideia Proposal: An Educational Manifesto*. (New York: Macmillan Publishing Co., 1982).
Mortimer J. Adler, *Paideia Problem and Possibilities: A Consideration of Question Raised by the Paideia Proposal*. (New York: Macmillan Publishing Co., 1983).
 5. The Twentieth Century Fund Task Force on Federal Elementary and Secondary Education Policy, *Making the Grade*. (New York: Twentieth Century Fund, 1983). ED 233 112.
 6. The College Board Educational Equality Project, *Academic Preparation for College: What Students Need to Know and Be Able to Do*. (New York: The College Board, 1983). ED 232 517.
 7. Educational Commission of the States Task Force on Education for Economic Growth, *Action for Excellence: A Comprehensive Plan to Improve Our Nation's Schools*. (Denver, CO:

Education Commission of the States, 1983). UD 023 107.

8. The National Science Board Commission on Precollege Education in Mathematics, Science and Technology, *Educating Americans for the 21st Century: A Report to the American People and the National Science Board*. (Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1983). 124pp. ED 223 913.
———, *Educating Americans for the 21st Century: Source Materials*. (Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office). ED 223 912.
 9. Theodore R.Sizer, *Horace's Compromise: The Dilemma of the American High School*. (Boston: Houghton Mifflin Co., 1984).
 10. Southern Regional Education Board Task Force on Higher Education and the Schools, *The Need for Quality*. (Atlanta, GA: Southern Regional Education Board, June 1981). ED 205 133.
 12. Marvin Lazerson, Judith Block McLaughlin, Bruce McPherson, and Stephen K. Bailey, *An Education of Value*. (Cambridge, MA: Harvard University Graduate School of Education, 1983).
- (6) Ravitch (1984, 70-71) は、エクセレンスが共通の必修教科やカリキュラムと関連づけて定義されると、脅迫的な概念として捉えられがちであるが、カリキュラム要件の強化が中退者をもたらすということに証拠はないことを歴史的に説明しようとしている。
- (7) この他に、エクセレンス概念構成の狭さについては、Greene (1984) を参照。

参考文献

- AFSHAR, Hamid M., *Theories of Competition and Cooperation in Relation to the Concept of Excellence in Education*. (Ed.D. dissertation, The University of Florida, 1962).
- ALTBACH, Philip G., KELLY, Gail P., and WEIS, Lois, ed., *Excellence in Education: Perspectives on Policy and Practice*. (New York: Prometheus Books, 1985).
- BREHM, Shirley Alice, *The Pursuit of Excellence Theme in American Education, 1940 - 1963*. (Ph.D. dissertation, Michigan State University, 1964).
- BROWN, Cynthia G., "Is 'Excellence' A Threat to Equity?" (1984), <Gross: 1985>.
- BRUNER, Jerome S., *The Process of Education*. (Cambridge: Harvard University Press, 1960).
- CROSS, Patricia, "Wisdom from Corporate America," [from idem, "The Rising Tide of School Reports," *Phi Delta Kappan*, (November 1984)], <Gross: 1985>.
- DARLING-HAMMOND, Linda, "Mad-Hatter Tests of Good Teaching," [*The New York Times*, (January 8, 1984)], <Gross: 1985>.
- DOWN, Graham, "Assassins of Excellence," (1983). <Gross: 1985>.
- DOYLE, Denis P. and HARTLE, Terry W., *Excellence in Education: The States Take Charge*, (Washington, D.C.: American Enterprise Institute for Public Policy Research, 1985).
- FANTINI, Mario D., *Regaining Excellence in Education*. (Columbus, Ohio: Merrill, 1986).
- GARDNER, John W., *Excellence: Can We Be Equal and Excellent Too?* (New York: Harper & Brothers, 1961).

- _____, *Excellence: Can We Be Equal and Excellent Too?* Revised Edition, (New York: W.W. Norton & Company, 1984).
- GRAY, Dennis, "The 1980s: Season for High School Reform," *Educational Leadership*, Vol. 39, No. 8, (May 1982).
- GREENE, Maxine, "'Excellence,' Meanings, and Multiplicity," *Teachers College Record*, Vol. 86, No. 2, (Winter 1984).
- _____, "Excellence and the Basics," *The Education Digest*, 51, (September 1985).
- GROSS, Beatrice and Ronald, ed., *The Great School Debate: Which Way for American Education?* (New York: Simon & Schuster, 1985).
- HARTZ, Louis, *The Liberal Tradition in America: An Interpretation of American Political Thought Since the Revolution*. (New York: Harcourt, Brace, 1955).
- HOWE II, Harold, "Giving Equity a Chance in the Excellence Game," (1983). <Gross: 1985>.
- ISSLER, Klaus, "A Conception of Excellence in Teaching" *Education*, Vol. 103, No. 4, (Summer 1983).
- JOHNSTON, William J. ed., *Education on Trial: Strategies for the Future*. (San Francisco: Institute for Contemporary Studies Press, 1985).
- MCDANIEL, Thomas R., "Inquiries into Excellence: A Reexamination of a Familiar Concept," *The Educational Forum*, Vol. 49, No.4, (Summer 1985).
- NATIONAL COMMISSION ON EXCELLENCE IN EDUCATION (NCEE), *A Nation at Risk: The Imperative for Educational Reform*, (Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1983).

- , *Meeting The Challenge of A Nation at Risk*.
(Cambridge: USA Research, 1984).
- NEWMANN, Fred M. and KELLY, Thomas E., "‘Excellence’ and the Dignity of Students," (1983). ERIC ED 242 031.
<Gross: 1985>.
- NORTHEAST REGIONAL EXCHANGE, "The National Reports on Education: A Comparative Analysis," [from GRIESEMER J. Lynn, and BUTLER Cornelius, *Education Under Study: An Analysis of Recent Major Reports on Education*. (1983)].
<Gross: 1985>.
- PASSOW, A Harry, *Reforming Schools in the 1980s: A Critical Review of the National Reports* (New York: ERIC Clearinghouse on Urban Education, Teachers College, Columbia University, 1984a). ED 242 859.
- , *A Review of the Major Current Reports on Secondary Education*. (New York: ERIC Clearinghouse on Urban Education, Teachers College, Columbia University, 1984b). ED 242 860.
- , "Tackling the Reform Reports Of the 1980s," *Phi Delta Kappan*, Vol. 65, No.10, (June 1984).
- PETERS Thomas J. and WATERMAN, Jr., Robert H., *In Search of Excellence: Lessons from America's Best-Run Companies*, (New York: Harper & Row, 1982).
- PINCUS, Fred L., "From Equity to Excellence: The Rebirth of Educational Conservatism," *Social Policy*, (Winter 1984).
- PRAKASH, Madhu Suri, and WAKS Leonard Joseph, "Four Conceptions of Excellence," *Teachers College Record*, Vol. 87, No.1, (Fall 1985).

RAVITCH, Diane, *The Troubled Crusade: American Education, 1945-1980*. (New York: Basic Books, 1983).

———, "The Continuing Crisis: Fashions in Education" (1984). From idem, *The Schools We Deserve: Reflections on the Educational Crises of Our Times*. (New York: Basic Books, 1985).

———, "American Education: Has the Pendulum Swung Once Too Often?" (1982). *ibid.*

RAYWID, Mary Anne, "The Coming Centralization of Education," [from RAYWID, Mary Anne, TESCONI, Jr., Charles A., and WARREN, Donald R., *Pride and Promise: Schools of Excellence for All the People*. (1984)]. <Gross: 1985>.

ROCKEFELLER BROTHERS FUND, Inc., *The Pursuit of Excellence: Education and the Future of America*. (New York: Doubleday and Company Inc., 1958).

TOCH, Thomas, "The Dark Side of the Excellence Movement," [*Phi Delta Kappan*, (November 1984)], *The Education Digest*. 50-9, (May 1985).

UNITED STATES DEPARTMENT OF EDUCATION, *The Nation Responds: Recent Efforts to Improve Education*. (Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, May 1984).

<謝辞>

本稿および註(1)であげた拙稿をまとめるにあたっては、特に資料面で、愛知学院大学の竹市良成先生、同志社大学の井上勝也先生、国際基督教大学の立川明先生にご協力いただいた。紙面をお借りして、改めて心よりお礼申し上げます。

また、本稿の内容に関する筆者の研究報告に対してアメリカ教育史研究会

の共同研究（文部省科学研究費総合研究A「アメリカ教育における等質とエクセレンス追求の史的研究」）に参加の諸先生方から貴重なご批判とご助言をいただいた。ご指摘いただいた点は、部分的には本稿の内容に取り入れることができたものもあったが、多くは今後の研究課題として取り組みたい。この場をお借りして、早稲田大学の市村尚久先生をはじめとする諸先生方のご指導に感謝申し上げます。

**THE GREAT SCHOOL DEBATE IN THE 1980s
AND TRADITIONALISM IN AMERICAN EDUCATION:
TWO CONCEPTIONS OF
EDUCATIONAL EXCELLENCE**

Yoshimitsu Matsuura

The purpose of this study is to examine the influence of Traditionalism in education over the Great School Debate in the 1980s in the United States. As the first part of the study, this paper aims to clarify the meaning and definition of *excellence* as an educational goal. And it will develop a conceptual framework to consider the position and trends of the current educational reform movement: the "excellence movement," and the debate about it (the Great School Debate), in the United States.

Between 1982 and 1985 lots of reports on the state of the nation's schools were issued in the United States. They emanated from diverse sources: the federal government and its agencies, state governments and their agencies, various private philanthropic organizations, business interests, testing organizations, and individuals. It is not too much to say that, in the 1980s, there has never been more spirited controversy about what schools should do in the history of American education. The key term of the current educational reform movement and the debate on it is the concept of *excellence* which is an ambiguous and undefined word. American people seems to be favorably disposed towards excellence in education. But it is used uncritically as an emotive slogan to support and justify practically any change, any reform, and any criticism of present educational policy.

The author of this paper tries to clarify the conceptions of excellence and to develop a conceptual framework of it, from following four points of

view:

1. To examine what kind of conceptions of educational excellence the commission and individual reports for educational reform adopt.
2. To examine the discussion and criticism about the conceptions of the reports.
3. To examine some conceptual frameworks of educational excellence which educational philosophers attempt to develop.
4. To examine the conceptions of educational excellence which developed in the discipline-centered education after the Russian's success in launching Sputnik in 1957.

It is given as a conclusion that there are two conceptions of excellence in education. The first conception means seeking to educate everyone to the limit of his or her ability and pursuing the development of human diverse potentiality at all levels. This conception is the characteristic of the 1960s'. The second conception of excellence in education means the attainment of academic and intellectual standards, basic skills, and a common core curriculum which is measurable by the minimum competency tests. This is the typical conception of the 1980s.